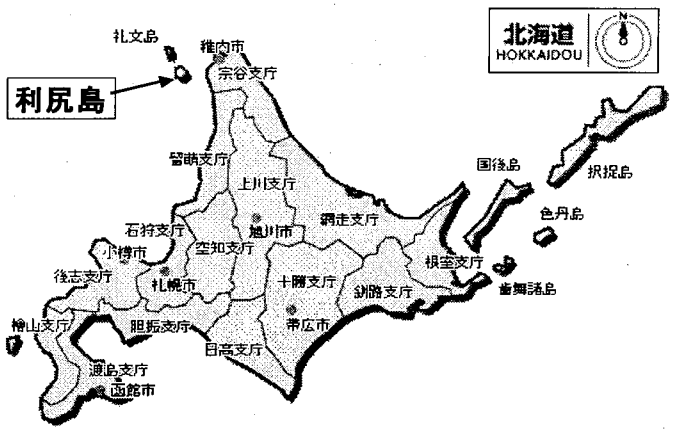
「海藻押し葉」で町おこし

－島のブランドづくりにチャレンジ－

仙法志漁業協同組合青年部
部長　　浜 田　 淳

1. 地域の概要



私たちが住んでいる利尻町仙法志は、北海道最北の市、稚内市から西に約50km離れた利尻島の南西側に位置し、海岸線は10km、人口は約800人の小さな漁村である（図1）。利尻島は、人口6千人余りの道内最大の離島で名峰「利尻富士」に象徴される手つかずの自然が残り、年間50万人の観光客が訪れる漁業と観光の島である。近年は、高齢化、後継者不足によって漁業者は年々減少し続けている。

2. 漁業の概要

仙法志漁業協同組合の組合員数は200名で、平成16年の水揚げは数量で1,447トン、金額で約6億5千万円となっている(図2)。主な漁業は組合員のほとんどが着業しているウニ、コンブ漁業とナマコ漁業で、操業は夏期に集中する(図3)。冬期間は岩ノリ、ギンナンソウなどの海藻採取を行っているが水揚げは極わずかである。

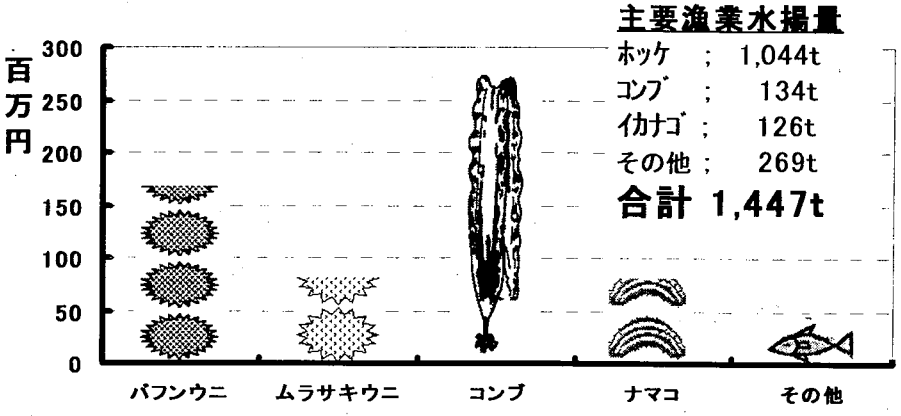


図2　平成16年　仙法志漁協主要漁業水揚

3. 研究グループの組織と運営

仙法志漁業協同組合青年部は、昭和37年に発足し、現在の部員数は11名である。主な活動は、各種イベントへの参加、ウニ人工種苗用のコンブ養殖や中間育成管理を行っている。また、冬には高齢者宅の除雪作業のボランティア活動も行っている。活動資金は、組合からの助成金と毎年8月に開催される「利尻浮島まつり」での売り上げ等で、主に宗谷管内で開催される青年部大会出席の旅費などに充てている。

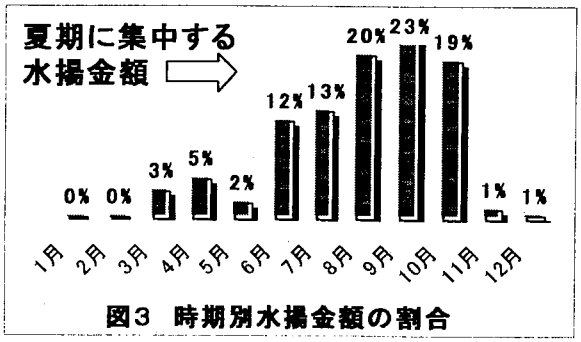


図3　時期別水揚金額の割合

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

写真1　青年部の話し合い

私たち青年部員は、全員がウニ、コンブ漁業を行いながら大工や土木関係の仕事で生計を立てている。数年前、漁協事務所に青年部員が集まったとき「冬場の仕事」が話題となった。秋までは漁業も陸仕事もあるが、冬場は仕事が途切れ失業状態となる。「働き盛りの30代が家でぶらぶらしているなんて」、「将来不安だよな」、そんなやりとりだった(写真1)。冬の日本海は連日時化が続き、小さな漁船が沖に出られる日はほとんどない。海岸に打ち上げられた色とりどりの海藻をながめながら、「この海藻が少しでもお金にならないかなぁ」と夢のような話をしていた。そんな見捨てられた海藻に光りを与えてくれたのが、押し花作家「たけだりょう先生」との出逢だった。先生は以前、利尻町で押し花教室を開いたのがきっかけで親交が深く、平成11年に開催された利尻町開基100年のイベントに招かれていた。先生がこの時寄贈してくれた「押し花アート」にはコンブやギンナンソウの「海藻押し葉」を巧みに取り入れた見事な利尻山が描かれていた(写真2)。「海藻は食べるもの」という思いこみが強かった私たちは、その作品を見て、ある考えが浮かんだ。「海岸に打ちあがる未利用の海藻を、押し花用素材として売れないものかと・・・」。さっそく役場に調べてもらったが、やはりこんな海藻など買ってくれるところはなく、やっぱり甘い考えだと気づいた。しかし、しばらくたって役場から、生の海藻ではなく、少し手を加えて「海藻押し葉」にすれば、全国に普及している「押し花」産業に参入できる可能性があることを聞いた。さらに「海藻押し葉」を商品化しているところは何処にもないことを知り、青年部員にやる気が沸いてきた。漁協と役場にさらに詳しい情報収集をお願いすると、「押し花」愛好者は全国に約 21 万人もいること、また、近年「生涯学習」の講座でも人気が高まっていることから「押し花」業界は成長市場であることがわかった。集まった情報をもとに漁協や役場と話し合った結果、この取り組みが「きっと将来、町の活性化や雇用の拡大に繋がる」という期待がふくらんできた。このようにして平成13年8月、青年部が中心となり、役場の全面的バックアップを受けて地域活性化と雇用促進を目的に「海藻押し葉の里づくり実行委員会」を立ち上げた。

写真2 「押し花」と「海藻押し葉」で描いた利尻富士
作「たけだりょう」

5. 研究・実践活動状況及び効果

(1)インストラクターの養成

「海藻押し葉の里づくり実行委員会」は、私たち青年部員と町内の文化系サークルに所属する町民10名の計21名で構成されている。私たちはまず、「海藻押し葉」を始める前に基本となる「押し花」の技術を学び、(財)日本手芸普及協会認定の押し花インストラクターの資格を取ることにした。資格取得に向けて青年部を代表して私と町民7名が、「押し花」の養成講座を受講すること

になった(写真3)。「たけだ先生」の離島での講座が始まったが、冬は時化でフェリーが欠航して予定通り開けず、1回の講座は朝から夜遅くまで及ぶこともあった。また、手先を使う細かな作業だけに、目の疲れや肩こりにも悩まされた。このようにして、通常1年半の養成講座を約1年でこなし、ついに平成14年8月に全員無事、「押し花」のインストラクター試験に合格し、次への大きな一歩を踏み出すことができた（写真４）。

写真3 「押し花」講座の様子

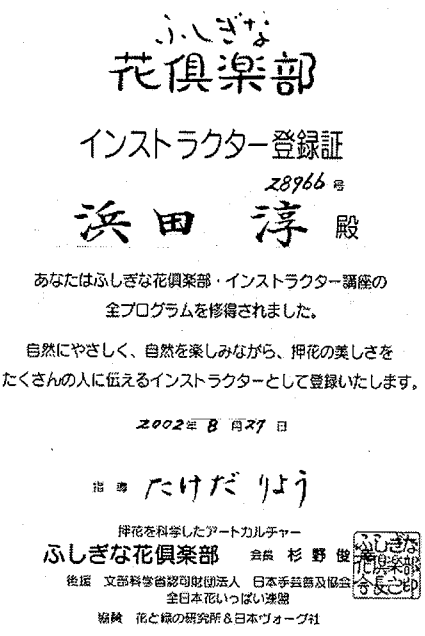


写真4 登録証

（２）海藻採集

海藻の採集は、時化で漁がない日や陸仕事が休みである日曜に集まる。夏の海藻採集は比較的楽な作業だが、多くの海藻が枯れる時期でもあり、「海藻押し葉」の素材として不向きな物が多いことがわかった。一方、冬から春にかけては海藻が最も生き生きする時期で、海藻が持つ本来の色や形が保たれ、良質な素材を手に入れやすいことを知った。私たちにとっても冬の海藻採集は非常に厳しい作業だが、前浜を知り尽くした私たち漁業者でなければできないという使命感が芽生えた(写真５)。はじめはみんな、やみくもに海藻を拾い作業場に持ち帰ったが、その後の仕分け作業が思った以上に大変で、採集する時間の何倍もかかってしまった。私たちの作業時間や人数は「海藻押し葉」の商品化に向けた重要な原価計算の基礎となるもので、もっと効率の良い方法がないか部員みんなで知恵を絞った。そこで予め必要な海藻をリストアップし、個人毎に集める海藻を割り当てたところ作業時間を大きく短縮することができた。

写真5 海藻採取の様子

（３）「海藻押し葉」作成技術の開発

私たちは「押し花」の技術を応用し長期間、「海藻押し葉」の色や形が保たれる技術開発を目標にした。はじめは「海藻標本」を作るような要領で台紙に海藻を並べ、おもしをかけた単純な方法で行った。すると厚みのあるアナメやマクサなどはなかなか乾燥せず、塩が浮き出てカビが生えてきた。そこで注意したのは塩抜きと乾燥で、これを完璧にしな

ければ、「海藻押し葉」の品質が保持されないと考えた。厚みのある海藻は十分な重しを使い、毎日吸水紙を交換すること、薄い海藻は水の中で形を整え金網で形が崩れないようにすくって乾燥させるなど、種類別に一つずつ問題を解決していった（写真６-１、２）。できた試作品は、「たけだ先生」に送りアドバイスを受けたことはもちろんである。また、海藻の持つ本来の色をさらに引き立てるためは、乾燥前の湯通やアルコール処理が有効であることがわかった。このように試行錯誤を繰り返しながら平成 15 年４月にようやく独自の「海藻押し葉」作成マニュアルが完成した。

写真6-1 「海藻押し葉」作成作業

写真6-2 「海藻押し葉」作成作業

（４）利用者の声

「海藻押し葉」の作成マニュアルをもとに、いよいよ「商品」の製造に取りかかろうとしたが、本当にこの「海藻押し葉」を使ってもらえるか一抹の不安があった。そこで全国の押し花愛好家のみなさんに試作品を送り、感想を聞いてみようと利尻町に提案した。すると「それならいっそ、試作品を用いたコンクールを開催しては」という話になった。そして平成 16 年９月、（財）日本手芸普及協会の協力と、地元教育委員会、郵政公社の支援をうけて「海と山に花を咲かせよう」をキャッチフレーズに、「海藻押し葉・押し花融合コンクール」が開催された（写真７）。会場である町の交流促進施設「どんと」には全国から約 600 を超える作品が集まり 15 日間で約 1,800 人が入場し利尻町の「海藻押し葉」を全国的にピーアールすることができた。コンクールでは、作品展示にコンブ乾燥機に使用する網枠を使うなど青年部員のアイデアが随所に盛り込まれ、会場には多くの漁業者の姿も見られた。

写真7 コンクール作品応募パンフレット

後日、出展者 600 名にアンケート調査を行い、「海藻押し葉」の魅力を尋ねたところ「個性的な形である」が 85 %、「めずらしい」が 67%、「押し花には無い色」が 55%という答えが返ってきた（図４-１）。また、「今後も海藻押し葉を使ってみたいですか」と尋

ねたところ 80%を超える人がまた使ってみたいという、うれしい結果となり、本格的な商品化に向けて大きな励みと自信に繋った（図４-２）。

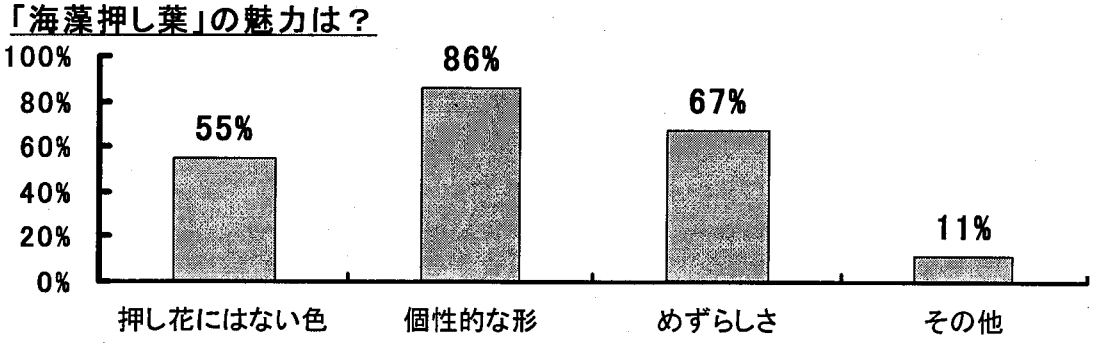


図4-1 アンケート調査結果

（５）商品化に向けて

現在、アンケート結果から素材として人気の高かったテングサ、ヒラコトジ、ギンナンソウなど 16 種を 5 種類ごとに詰め合わせた「海藻押し葉パック」（写真８-１、２）の商品化に向け、質・量ともに市場の期待に応えられるよう体制づくりを行っている。価格についてもアンケート結果を参考にただ今検討中である。商品作りは、築100年の「旧海産問屋」を借りて行っており、実行委員の作品やコンクールの作品が展示されていることで、アトリエとして観光スポットの一つにもなっている（写真 9、10、11）。

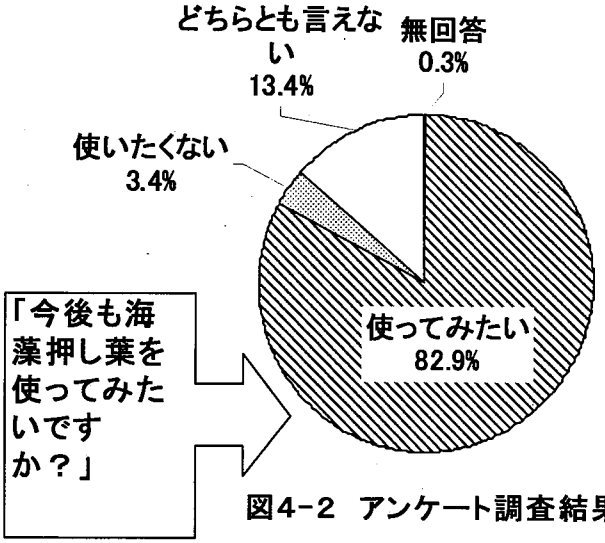


図4-2 アンケート調査結果

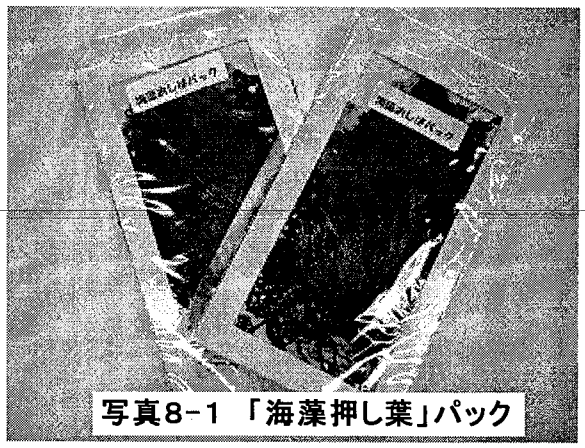


写真8-1 「海藻押し葉」パック

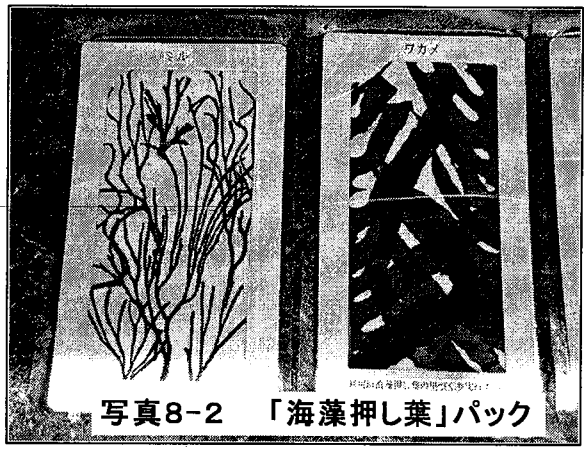


写真8-2 「海藻押し葉」パック

6. 波及効果

（１）アトリエでは旅行会社とタイアップした「海藻押し葉アート」体験ツアーを企画し、見る観光に加え体験する観光を盛り込み好評を得ている。

（２）「海藻押し葉・押し花融合コンクール」が好評を得て、平成 17 年に宗谷支庁や北海道庁で「海藻押し葉移動展」を開催し、利尻町の「海藻押し葉」を広くピーアールすることができ

た。

（3）小中学校や老人クラブから「海藻押し葉」体験への要望も多く、この活動が利尻島全体に浸透してきた。

7. 今後の課題や計画と問題点

（1）「海藻押し葉」は「押し花」に比べ乾燥、成形作業等に時間と技術を必要とするため、乾燥、成形を担当する人員（プレッサー）の養成を行う計画である。

（2）大手押し花普及団体との連携により教材パック用「海藻押し葉」の本格的な生産を開始する予定である。

（3）本格的生産に向けて今後、海藻収集量や作業回数も増加するが市場の要望に応え、常に良質な海藻を提供できるよう努力していきたい。

写真9　築100年の「旧海産問屋」（作業場兼、アトリエ）

写真10　作業場兼、アトリエ内の様子

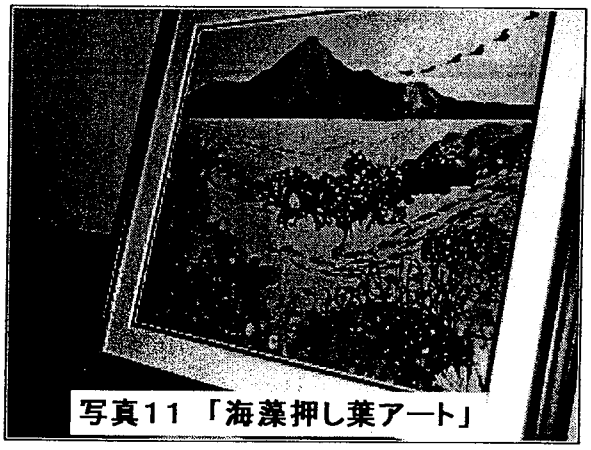


写真11「海藻押し葉アート」

利尻町「海藻押し葉」パンフレット